

読者のページ



お慶びの年

都野津町 濱松道子

今年も早や残り数日となりました。本年は四月二十一日の副住職様ご結婚からお目出度つづきの浄光寺様でした。

十月六日石見聞真会百周年記念大会のお手伝いも間もなく、十月二十七、二十八日は大竹市光明寺に入寺された次男浩爾様の住職継職法要でした。二十七日は本堂・山門等大修復法要とのことで、私たち浄光寺門徒は二十八日の継職法要に二十三名出席させていただきました。

出発時は少々曇りがち降りそうな天気でしたが、お寺に近くなって秋晴れの素晴らしい好天気。御門徒の皆様、たくさんの方々、又先に行って居られた浄光寺御住職、坊守様達よりお出迎えをいただきました。浄光寺一行は本堂の一番中央に通され落ちつき、しばらくして法要・法話・記念式典などが行なわれて、浩爾様の壽高山光明寺第十五世住職としてのお言葉もやさしく力強く話されて、感激して涙して聞きました。稚児行列もすごい人でした。新居も出来て居りお相手の若坊守様がいつ来られても良い様にして有りました。

光明寺十五世住職様の御健康を祈りながら、本当に良い一日をすごさせていただき帰途に着く事が出来ました。
有難うございました
合掌



わたしたち、あっちゃんと、あっこさんに「式章とお数珠」を作ってもらいました。皆様のお越しを浄光寺玄関の前でお待ちしています。違いに来てね。(誰か私達の名前をかंगाえてね)



気づかせてもらった私

跡市 北風総子

主人の死、父の死、身近な人の死を通して、私自身が気づかせてもらったことが一つあります。それは「おかげ、おかげさま」です。浄光寺坊守様よりいただいた御正信念仏偈のテープ、これが正信偈との出会いでした。

仕事から誰もいない家に帰り涙、涙でテープと一緒に仏壇の前で御経を称え、称え終わると不思議と気持ちが落ちついていったのをよく覚えています。この時本当に「助けてもらった、ありがたい、おかげさま」を強く感じました。

父は温厚で人との出会いをとて大切にしてくる人でした。「おかげさんだなあ、おかげさんで生かされとるだけえ」と口ぐせのように言っていました。毎食前御正信偈を唱え、今日は誰々の月命日だからと行譜をといった毎日でした。死期が近づくと「阿弥陀さまがそこへ来とんさる、なんときれいだなあ、きれいな雲だなあ」「わしも仏さんになるんだだけえ何の心配もいらんぞ」と静かに御浄土へと帰った父。私たちに大きな安心をみせてくれました。よかったね。おじいさん、本当に有難うと思えました。

父の言うていた「おかげ、おかげさま」自分をとりにまく人たちのおかげがあるから生きてるんだ、生かされているんだなあ、私が気づかせてもらったことを本当に嬉しいことだと思えます。大切な二人との別れはとても悲しくてとても淋しいものでしたが、二人の死を通して大きな遺産を私達親子に残してくれたのだと思います。本当にありがたいです。



「うたたねの歌」

能美 真由良

二〇〇七年も、残すところあと数日となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか？お陰様でわたしは、両親・前坊守さん・若院をはじめ、たくさんのご門徒の皆様、とてもあたたかく支えて頂きまして、浄光寺で初めてのお正月を迎えようとしています。本当に、ありがたいです。毎年のことですが、一年が経つのが早くて驚きます。

「お正月」 現代では、普段の日々と大差ないものになってきましたが、昔は特別なものでした。たった一日変わるだけで、何が変わるのだろうと思ったこともありま。が、これは先人より受け継がれて来た、本当に素晴らしい「節目」であります。それは「時」を意識する「過ぎゆく」「命」を意識する事ができるからです。

わたし達のこの身が、限りあるものであると教えてくれます。しかし「無常」であることに目を向けるといのは、決して簡単ではありません。「医者と坊さんには、世話になりたくないなあ」と言われた方があ

る様に、つらい事でもあります。

ある先生が「生死」と書いて、何と読むかを尋ねられました。「せいし」と読むと、「生きる事と、死ぬ事は逆のこと」であり、「しよじ」と読むと「生きること＝生老病死、すべてを含めたこと」である、とお話して下さいました。

「生」を見ただけで、本当の意味で生きる事はできないのです。だとすれば、わが命には限りがあると知って初めて、この瞬間が輝き始めるのではないのでしょうか。

今年を象徴する一文字「今年」の漢字は「偽」だそうです。それを聞くと「なんて嫌な文字だろう」「誰だ偽なのは...」とすら思ってしまうのですが、お念仏のみ教えでは「虚仮不実(こけふじつ)「わが身こそが偽」であると頂きます。真実なものを持ち合わせていない、限りある、わたしです。「偽」なるものに呼びかけ、願い、抱きとめて下さるのが「真実」である『南無阿弥陀仏』です。

こんなわたしであるからこそ、ほっておけない仏様です。『わが名を呼びなさいよ。嬉しいときは嬉し、悲しいときは悲しいままに、いついかなる時も、あなたのそばにいますよ』と、「こちらから願うまでもなく、願うて下さいませ。

十月末の歎異抄講座で、藤田徹文先生は、

次のようにお話しして下さいました。

「細胞の一つ一つは話さないし考えない、それが集まって人間(個)となる。無常が集まって、永遠となる。数えることのできない命が繋がって、無量となる」

無量寿・無量光の、時間と空間を越えた阿弥陀様の中、すべての命が網の目の様に繋がって、今わたしという身がここにあるのだと教えて頂きました。

先人より受け継がれて来た「お正月」「お念仏」まさに、命のリレーであります。せつかくの「ご縁」をいま、ここで、ただいて味わって、新年を迎えたいものではないでしょうか。

浄光寺では、毎年十二月三十一日(月)夜十一時半より、除夜会があります。坊守さんの美味しい、ぜんざいもあります！「ご都合の許す方は是非、お寺へお参り下さいませ。また、ご自宅におられる方も是非お念仏で、ご一緒に新年をお迎えいたしまし。来年も、ご門徒の皆様と共に、歩ませて頂きたいと思えます。よろしくご指導の程、お願い申し上げます。

合掌

